冨士昭雄先生を送る

高田知波

駒澤大学国文学科にとっての二十一世紀第一年は、学内の定年規程に従って、冨士昭雄先生をお送りしなければならないという巡り合わせになった。

近世文学、とくに西鶴研究の泰斗としての先生の名声はあまねく知れわたっており、専攻分野を異にする私などが先生の学問について言及するのはおこがまし過ぎる。また教務部長や仏教文学研究所長等、学内の数々の要職を歴任されてこられたご功績についても、あらためてご紹介するのはかえって礼を失することになるに違いない。そこで大先輩としての冨士先生の、その人間的な魅力について述べさせていただくことで、送る言葉に代えさせていただきたいと思う。

冨士先生の魅力の第一は、誰に対しても親切なお人柄だという点である。お願いしたことを快くお引き受けいただけただけではなく、先生はさらにご自分から進んで、さまざまな場において、後輩たちに対する積極的なアドバイスを与えて下さった。時には電話で懇切なご助言をいただいて恐縮したこともある。しかも先生のアドバイスには強圧

的なところが微塵もなく、よき先輩に恵まれたという思いが私にはある。

先生の第二の魅力は、頭の回転の速さである。クレバーな人材が揃った世界の中にあっても、冨士先生の聡明さは群を抜いておられた。「一を聞きて以て十を知る」という言葉が『論語』にあるが、先生の場合は少くとも「以て二十を知る」ではないか、というのが私の偽わらざる実感である。いたって思考テンポの遅い私などは、さぞやじれったい存在として先生の目に映っていたに違いないと思うが、それでもけっして苛立ちをお見せにならないところに、学生たちから「仏の冨士」と敬慕される先生の徳の高さがあった。

先生の魅力の第三は、若々しさである。先生はおよそ「老成」という言葉とは無縁の方である。あえて奇抜な比喩を使わせていただくと、サッカー場で、オフサイド・トラップなどというこちたき防壁などには目もくれず、ひたすらゴール目指して一直線に疾驅するストライカーの姿を連想したことが、私は何度もある。一般的には若者の特性と考えられがちなこのエネルギーを、先生は古稀を迎えられてもなお見事に維持された。私ははるか後輩であるにもかかわらず、もう自分の人生が峠を越えてしまったような空虚感に襲われることが増えてきた。先生から若々しさキープの秘訣を是非教わりたいというのが、私の密かな願いである。

冨士先生の若々しさが今後も久しく持続されることを祈りつつ、国文学科に対する積年のご尽力に対して、心からお礼を申し上げたいと思う。